

華嚴經における淨土思想

李道業

一 序 言

二 華嚴經における淨土思想

(1) 淨 土 義

(2) 仏 身 義

(3) 念 仏 義

(4) 弥陀淨土義

三 結 語

一 序 言

華嚴教学は哲学的であり論理的であり自力的な思想である。弥陀淨土教学は宗教的であり信仰的であり他力的な思想であるといえる。このように正反対の立場にあるような二つの思想が果たして『華嚴經』において両立できるのであるうかというのが第一の問題である。

『華嚴經』には淨土・念佛・念佛三昧・本願・往生・西方極樂世界・阿彌陀佛・無量寿・無量光等の語句が出てくるが、これらは如何なる意味に説かれているのであろうか。果たして弥陀淨土思想的な意味に説かれているのであろうか

というのが二番目の問題である。

『華嚴經』において説かれている毘盧遮那仏身義・蓮華藏淨土義・念佛義等の内容は如何なるものであり、弥陀淨土思想において説かれている無量寿や無量光仏義・極樂淨土義・称名念佛義等とは如何なる関係があるのであろうか。同じ点は何であり異なる点は何かというのが三番目の問題である。

『華嚴經』の「入不思議解脱境界普賢行願品」（以下「普賢行願品」と略称する）においては明らかに弥陀淨土義が説かれている。六十卷本や八十卷本にはない弥陀淨土義が四十卷本においてのみ説かれている理由は何であり、『貞元經』にのみ説かれているその内容は何であろうかというのが四番目の問題である。

二 華嚴經における淨土思想

華嚴經には所謂弥陀淨土思想的な語句が多く説かれている。例えば、念佛・念佛三昧・本願・往生・他力・西方極楽世界・無量寿・阿彌陀仏等である。しかしこれらの語句は必ずしも弥陀の淨土思想をあらわすのではない。

周知の通り仏教用語は固定的であるとか一義的ではなく、流動的であり多義的である。『華嚴經』の教義は自力性と論理性と哲学性が強いと考えられるが、他力性と非論理性と信仰性が豊富な弥陀淨土教義と如何なる一致点や相通点があり得るであろうか。

仏教思想史において見ると、多くの華嚴教家たちが弥陀淨土思想を華嚴的に受用しており、淨土教家は『華嚴經』を依用して淨土思想を体系化しているが、その教理的な根拠は何かという問題は『華嚴經』と弥陀淨土思想との関係を究明することにおいて除くことのできない課題であると考えられる。

故にここでは『華嚴經』所説の(1)淨土義・(2)仏身義・(3)念佛義そして(4)弥陀淨土義を、弥陀淨土教におけるそれらと比較して論述してみたい。

(1) 浄土義

淨土とは言葉の通り「淨らかな國土」という意味である。仏や菩薩が居住する清淨な世界という意味である。「華嚴經」所説の淨土とは蓮華藏世界といえる。『華嚴經』の華藏淨土と淨土教學における西方淨土は如何なる関係にあるのか。換言すると遮那淨土と弥陀淨土は同じものであるのか、異なるものであるのかについて華藏淨土を中心にして論述しながら、

- (1) 華藏淨土が建立されるにいたつた理由
- (2) 華藏淨土の位置
- (3) 華藏淨土の莊嚴
- (4) 証入の方法すなわち証入の実踐行

に分けて弥陀淨土のそれらと比較して述べることにする。

(1) 蓮華藏世界が建立されるにいたつた理由は何であろうか
「盧舍那仏品」において、

此蓮華藏世界海 是盧舍那仏 本修菩薩行時 於阿僧祇世界微塵數劫之所嚴淨 於一一劫恭敬供養世界 微塵等如來 一一仏所 清修世界海微塵數願行¹

と説いている。蓮華藏莊嚴世界すなわち華藏淨土が建立された理由は、盧舍那仏が久遠劫の前に、①微塵數の如來を恭敬供養し、②微塵數の願行を清淨に修めた功徳の結果であると説明されている。一言で述べると、華藏淨土は盧舍那仏

の如來の恭敬と願行の所成であることがわかる。

それでは弥陀淨土が建立されるにいたつた理由は何であろうか。

『無量壽經』卷上によると、

乃往過去久遠無量不可思議無央數劫 錠光如來興出於世 教化度脫無量衆生 …… 時有國王聞佛說法 心懷悅予
 尋發無上正真道意 棄國捐王行作沙門 号曰法藏 …… (法藏) 比丘白佛 唯垂聽察 如我所願 当具說之 (第
 一願) 說我得佛 國有地獄餓鬼畜生者 不取正覺 …… (第四十八願) 說我得佛 他方國土 諸菩薩衆 聞我名字
 不即得至第一第二第三法忍 於諸仏法 不能即得不退轉者 不取正覺 …… 於不可思議兆載永劫 積殖菩薩無量
 德行 …… 法藏菩薩今已成佛 現在西方 去此十萬億刹 其佛世界名曰安樂²

と説かれている。この内容を要約して整理すると、過去久遠劫の前に錠光如來があり、それよりさらに五十三仏以前に出現した世自在如來という仏の説法を聞いて正覺を求めようとする心を発して出家した王がいたが、その名は法藏であった。その比丘は衆生を救濟せんという四八大願を発した後に不可思議劫の間に菩薩の徳行を実践した。法藏比丘は菩薩道を成就して成仏した後、今は西方にて、その西方淨土を安樂世界と称するという内容である。

『阿彌陀經』においては、

從是西方過十萬億仏土 有世界 名曰極樂 其土有仏 号阿彌陀 今現在說法³

と説かれている。すなわち法藏菩薩は成仏し、ここから十萬億仏土を過ぎた西方にあり、その世界を極樂といい、その仏を阿彌陀であるという説明である。

このことから考察すると、弥陀淨土が建立されるにいたつた過程は華藏淨土のそれと別に差異はない。すなわち法藏

比丘は①久遠劫の前に衆生救済の四十八大願を立て、②不可思議劫の間、菩薩の徳行を修業し、阿弥陀仏になり西方の極楽世界において今も説法をしているというのである。

故に弥陀淨土は法藏菩薩の菩薩行と四十八大願によつて建立されたといえる。弥陀淨土が法藏の願力所成であることとを『觀無量壽經』においては、

極樂國土有八池水 一一池水七寶所成 其寶柔軟從如意珠王生 分為十四支 一一支作七寶色黃金為渠 渠下皆以雜色金剛以為底沙 一水中有六十億七寶蓮花 …… 如此妙花 是本法藏比丘願力所成⁴

と説かれている。すなわち極樂國土には衆宝に莊嚴された池水・蓮花・妙花等があるが、これらはみな法藏比丘の願力によつて生まれたものであると説かれている。

上述したように華藏淨土は久遠劫の前に盧舍那仏の恭敬供養仏と願行によつて建立され、弥陀淨土は久遠劫の前に法藏比丘の菩薩行と四十八大願によつて建立されたといふ点においてこの両淨土は差異がない。願の主体考の名称が盧舍那仏であるのか法藏比丘であるのかという人名の差異があるのみであり、彼らによつて建立された淨土の名称が蓮華藏莊嚴世界であるのか西方の極樂世界であるのかという淨土名の差異があるのみで、これら両淨土は菩薩行と願力の所生であるという点において等しいものであることがわかる。

(2) 蓮華藏世界の位置はどこであるのか

『華嚴經』の「盧舍那仏品」に、

當知 有須弥山微塵等風輪 持此蓮華藏莊嚴世界海 最下風輪名曰平等 彼持一切寶光明地 …… 最上風輪名勝

藏持一切香水海 彼香水海中 有大蓮華 名香幢光明莊嚴 持此蓮華藏莊嚴世界海⁵

と説かれている。すなわち蓮華藏世界は十種の風輪によつて支持されている大蓮華の中にあると説かれている。もう少し具体的に述べると、十種の風輪がある。最下位の風輪を平等というがその風輪には一切宝光明地がある。その上の風輪は種種宝莊嚴というがその中には清淨光寶地がある。このように順に上つていつて最上位にあるのが勝藏風輪というがそこには香水海がある。その香水海の中に大蓮華があり、蓮華藏莊嚴世界はまさにこの蓮華の中に存在するというのである。

この説明だけでは華藏世界の位置は明白ではない。十種の風輪の中で最上位にある勝藏風輪にある香水海、その香水海にある大蓮華の中に存在することがわかるだけである。ところが「盧舍那仏品」においてはこれについて、

蓮華藏莊嚴世界海東 次有世界海 名淨蓮華勝光莊嚴 中有仏刹 名衆寶金剛藏 仏号法水覺虛空法王 於彼如來
 大衆海中 有菩薩 名觀勝法妙清淨王 為仏光明所開發已 与世界海塵數菩薩眷屬因遡來向仏所 充滿十方一切虛空
 興十種寶色光明華雲 悉皆弥覆充滿虛空 十種妙寶須弥山雲 十種日輪雲 十種寶華雲 十種妙寶樓閣藏雲
 十種華樹雲 十種妙香現衆色雲 十種一切妙音聲雲 如是一切悉皆弥覆充滿虛空 来詣仏所 供養恭敬礼拜已 在於東方雜華光藏師子座上結跏趺坐 此世界海南 次有世界海 名衆寶月光莊嚴藏 中有仏刹 名無量光莊嚴 仏号普智光勝須弥山王 …… 此世界海上方 次有世界海 名雜寶光海莊嚴 中有仏刹 名樂行清淨 仏号無礙功德稱離闇光王⁶

と説かれている。すなわち、蓮華藏世界の東には淨蓮華勝光莊嚴世界があるがその世界には衆寶金剛藏仏國があり、その仏國には法水覺虛空法王仏が住している。蓮華藏世界の南には衆寶月光莊嚴世界があり、その世界にはまた無量光莊嚴

仏国があり、その仏国には普智光勝須弥山王という仏が住み、また蓮華藏世界の上には難宝光海莊嚴世界があり、その世界には樂行清淨仏国があり、その仏国には無擬功德稱離闇光王という仏が住むと説かれている。蓮華藏世界の東西南北と四維上下には仏国と主仏が存在するという説明である。換言すると、蓮華藏世界は十方の仏国土のどこにでもあるという意味になる。

この内容を要約すると、十方の仏国土の真ん中に十種の風輪があり、その十風輪の中で最上位の風輪に香水海があり、その香水海の中に大蓮華がある。その大蓮華の中に蓮華藏莊嚴世界があると華藏淨土の位置は説明されている。それは弥陀淨土の位置はどこなのか。

『無量寿經』に、

法藏菩薩 今已成仏 現在西方 去此十万億刹 其仏世界 名曰安樂⁷

と説かれている。すなわち安樂世界は西方にあるが、この娑婆世界から十万億仏刹も離れているという意味である。

『阿弥陀經』によると、

從是西方過十万億仏土 有世界名曰極樂 其土有仏 号阿彌陀 今現在說法⁸

と説かれている。すなわち、この娑婆世界から西方に十万億仏土を過ぎた所に極樂世界が存在するが、阿彌陀仏は今も説法をしていると説かれている。弥陀淨土はこの娑婆世界から十万億仏土も離れた西方すなわち他方に存在することがわかる。

上述した通り蓮華藏世界は大蓮華の中に存在するがその蓮華は香水海にあり、香水海は東西南北及び四維上下の十方に存在する仏の世界で囲まれている。そしてその十方世界にも香水海があるので、華藏淨土は特定の場所にのみ存在す

るのではなく十方仏土のどこにでも存在するのである。

これに反して弥陀淨土はこの娑婆世界ではない他方にある。この娑婆世界から十万億仏土も離れた西方の弥陀淨土上にのみ存在する。故に華藏淨土と弥陀淨土はその所在の位置を全く異にしていることがわかるのである。

(3) 華嚴淨土は如何に莊嚴されているのか

淨土は仏や菩薩の所居土である。故に衆宝によつて莊嚴されることは勿論のことであるが、もう少し具体的には如何に莊嚴されているのか。

蓮華藏世界は四方が等しく平らであり、清淨で堅固である。金剛輪山がその周囲をあまねくとり囲んでいると説かれている⁹。その金剛輪山の香水海に関して「盧舍那仏品」においては、

彼大地處 有不可說仏刹微塵等香水海 衆寶莊嚴 一切香摩尼寶王 以為其岸 宝王羅網 弥覆其上 衆寶色水
盈滿其中 一切衆華 皆悉開敷 細末栴檀 以香其水 常出如來妙音不絕 衆香次第普熏十方 雜寶階道真珠欄楯
衆寶潮浪出妙音声 恒沙仏刹微塵數等寶華樓閣 周匝圍遶 無量仏刹微塵等衆寶華城 以周其外 十大千世界微塵
數華 一一蓮華 各十由旬 開敷鮮茂 遍布水上 其香普熏 一切世界 十仏國土 震數香樹 以為莊嚴¹⁰

と説かれている。すなわち総論的に述べると、香水海は衆宝によつて莊嚴されている。各論的に述べると、香水海の岸と香水海を覆つていての網とそこに満ちていての水は衆宝よりなつていて、一切の衆華は満開になつており、その水を香り高くしている。その上、如來の妙音は断えることもなく、種々の香が十方世界を香り高くしていると説かれている。

実に衆宝の階道と欄楯と潮浪は微妙な音声を出しておらず、寶華の樓閣と城とにて囲まれており、十由旬にもなる大蓮華は一切世界を香り高くしていると描写されている。

要約すると、華藏淨土は衆宝と妙音と蓮華の香によつて莊嚴されているといえる。それでは弥陀淨土の莊嚴はどうであろうか。弥陀淨土の莊嚴に關しては『觀無量壽經』¹¹ や『無量壽經』¹² にも説かれてゐるが、『阿弥陀經』によると、

極樂國土 七重欄楯七重羅網七重行樹 皆是四寶 周匝圍繞 是故彼國 名曰極樂 又舍利弗 極樂國土 有七寶
 池 八功德水 充滿其中 池底純以金沙布地 四邊階道 金銀琉璃頗梨合成 上有樓閣 亦以金銀琉璃頗梨車渠赤
 珠馬瑙 而嚴飾之 池中蓮花大如車輪 青色青光 黃色黃光 赤色赤光 白色白光 微妙香潔 舍利弗 極樂國土
 成就如是 功德莊嚴¹³

と説かれている。極樂國土は七重の欄楯と羅網そして樹とにより圍まれているが、それらはすべて四寶により成つている。極樂國土には七寶池と八功德水があるが、功德水の底と四邊の階道そして樓閣はすべて七寶で莊嚴されている。池の大蓮華は微妙な光と香を放つてゐると説かれている。さらに續いて『阿弥陀經』においては極樂國土の功德莊嚴が説かれている。すなわちそこには天の音樂があり、奇妙な雜色の諸鳥による和雅音が昼夜にわたり聞かれ、種々の微妙な風の音と音樂が同時に聞こえると説かれている。これが弥陀淨土の莊嚴である。

上述したところによると、華藏淨土と弥陀淨土とは衆宝によつて莊嚴されている。兩淨土は衆宝莊嚴という点において相違はない。

(4) 華嚴淨土への証入行や弥陀淨土への往生因は何であり如何なる関係があるのか

『華嚴經』は菩薩行を説く代表的な經の中の一つであるといえる。衆生位から仏位にいたる菩薩の階位と実踐行が非常に具体的に説かれているからである。菩薩行とは上求菩提と下化衆生との自利利他の行であるといえるが、『華嚴經』の

「菩薩雲集讚仏品」に、

欲求一切智 自然成正覺
先當淨其心 具修菩薩行¹⁴

と説かれている。すなわち、智と覺を成就するためにはその心と菩薩の行を淨修しなければならないという意味である。「盧舎那仏品」には、

無量劫海修功德 供養十方一切仏
教化無辯衆生海 卢舎那仏成正覺¹⁵

と説かれている。盧舎那仏が正覺を成就したのは十方の諸仏を供養し、無量の衆生を教化した功德によるものであることがわかる。ここで「供養十方一切仏」を上求菩提に、「教化無辯衆生海」を下化衆生に理解するならば盧舎那仏が正覺を成就したのは自利と利他の菩薩行によることがわかる。

「菩薩說偈品」には、

一切世界中 発心求仏者
先立清淨願 修習菩薩行¹⁶

と説かれている。発心して仏を求めるとする者がすべき」とが二つある。一つは清淨なる願を立てる事であり、もう一つは菩薩行を修習するということであるという意味である。菩薩行において願と行が必須条件であることがわかる。蓮華藏世界が成就されたことも菩薩の願と行によるものである。

「盧舍那仏品」においては、

此蓮華藏世界海 是盧舍那仏 本修菩薩行時 於阿僧祇世界微塵數劫之所嚴淨 於一一劫恭敬供養世界 微塵等如
來 一一仏所 浄修世界海微塵數願行¹⁷

と説かれている。ここにも華藏淨土が成立するようになった理由が明白にあらわれている。その理由は久遠劫の前に盧舍那仏が菩薩行を行ずる時に微塵數の如来に恭敬供養して微塵數の願行を淨修したからであると説かれている。

上述したように『華嚴經』における実踐行は菩薩行であり、その菩薩行は願と行に要約することができる。換言すると、華藏淨土への証入行は菩薩行といえるし、十信位から十地及び等覺妙覺位までの種々の菩薩行は菩薩の願と行に要約することができる。

次に弥陀淨土への往生因は何であるのか。世親は『無量壽經優波提舍』において、

修五念門成就者 畢竟得生安樂國土 見彼阿彌陀仏 何等五念門 一者禮拜門 二者讚歎門 三者作願門 四者觀察門 五者廻向門 云何禮拜 身業禮拜阿彌陀如來應正遍知 為生彼國意故 云何讚歎 口業讚歎 称彼如來名如彼如來光明智相 如彼名義 欲如實修行相應故 云何作願 心常作願 一心專念 畢竟往生安樂國土 欲如實修行奢摩他故 云何觀察 智慧觀察 正念觀彼 欲如實修行毘婆舍那故 …… 云何廻向 不捨一切苦惱衆生 心常作願廻向為首 成就大悲心故¹⁸

と説いている。世親は弥陀淨土への往生因として①礼拝（身業）、②讚歎（口業）、③作願（意業・奢摩他）、④觀察（智業・比婆舍那）、⑤廻向（大悲）の五念門を提示している。即ち、安樂國土へ往生するがためには身口意の三業を清淨にし、三昧を修習して廻向を実践すべきであると説いている。

『觀無量壽經』によると、

如是至心令声不絕 具足十念 称南無阿弥陀仏 称仏名故 於念念中 除八十億劫生死之罪 命終之後 見金蓮花
猶如日輪住其人前 如一念頃即得往生極樂世界¹⁹

と説かれている。すなわち、極楽世界への往生因として具足十念と南無阿弥陀仏の名号を称えることを提示しているのである。弥陀淨上に往生することができる実踐行として仏名を称えることを勧めているが、これとほとんど同様の内容が『阿弥陀經』には、

聞説阿弥陀仏 執持名号 若一日 若二日 若三日 若四日 若五日 若六日 若七日 一心不亂 其人臨命終時
阿弥陀仏与諸聖衆 現在其前 是人終時 心不顛倒 即得往生阿弥陀仏極樂國土²⁰

と説かれている。すなわち若一日や若二日乃至七日間だけ一心に阿弥陀仏の名号を執持すれば、弥陀の極楽國土に往生することができると説かれている。ここでは弥陀淨上への往生因として「一心不亂」と「執持名号」が提示されている。

『無量壽經』には、

其下輩者 十方世界諸天人民 其有至心欲生彼國 仮使不能作諸功德 当發無上菩提之心 一向專意乃至十念 念
無量壽仏 願生其國 若聞深法 歡喜信樂 不生疑惑 乃至一念 念於彼仏 以至誠心 願生其國 此人臨終 夢
見彼仏 亦得往生²¹

と説かれている。ここでは往生因として「至心」と「十念」そして「願」を提示している。至心に無量壽仏を念じ、その国に生まれようとする願によって往生することができると説かれている。

以上で見ると、弥陀淨土思想において往生因として除くことのできないのは、「具足十念」と「執持名号」すなわち「称名念佛」と共に「往生願」の三つである。この三つの中でも願は特に強調されている。『無量寿經』²²によると、法藏比丘は四十八大願によつて十劫前に成仏し、今は安樂國土に住むと説かれている。『觀無量壽經』においては、極樂國土は法藏比丘の願力所成と説かれている。『阿彌陀經』においては、

若有人已發願 今發願 當發願 欲生阿彌陀佛國者 是諸人等 皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提 於彼國土 若已生 若今生 若當生 是故 舍利弗 諸善男子善女人 若有信者 応當發願生彼國土²³

と説かれている。すなわち阿彌陀仏国に生まれることを願い、過去に発願していたり、現在に発願したり未来に発願すれば、その人は必ずその国に生まれるようになるが故に、信心のある者は当然に阿彌陀仏の國土に生まれることを発願しなければならないと説かれている。

上述したところによると、華藏淨土や弥陀淨土への証入行乃至往生因には同じ点と異なる点がある。すなわち華藏淨土は久遠劫前に盧舎那仏が微塵数の願行を淨修した結果として莊嚴された淨土であり、(盧舎那)仏は菩薩行と共に清淨願によつて求められる。弥陀淨土は法藏比丘の四十八大願によつて成立し、莊嚴された淨土である。そしてその弥陀淨土に往生するための必須条件の中の一つに発願があげられる。このように証入行乃至往生因としての願が強調されている点においては同じである。異なる点は、盧舎那仏が正覚を成就し華藏淨土の主仏になつたことは無量劫海に十方の諸仏を供養し衆生を教化した菩薩行の結果であるが、淨土三部經は弥陀淨土への往生因を具足十念または称名念佛に置いている。

以上において『華嚴經』所説の華藏淨土と淨土三部經所説の弥陀淨土を比較して述べてきたがその結果、

(1) 華藏淨土と弥陀淨土は菩薩の願力所成という点から見ると建立された原因は同じである。

- (2) 華藏淨土は十風輪の上にある香水海、その香水海の上にある大蓮華の中にある。その香水海を中心にして十方に各々の香水海があり、その香水海ごとに大蓮華があり、その大蓮華ごとに華藏淨土があるから結局は華藏淨土は十方のどこにでもあるものである。しかし弥陀淨土の方向はこの娑婆世界の西にあり、距離は十万億国土も離れた他方にある。故に両淨土の位置は全く異なることがわかるのである。
- (3) 両淨土は衆宝によつて莊嚴されているという点においては全く同じである。
- (4) 華藏淨土への証入行は菩薩行に要約されているのに反して、弥陀淨土への往生因は願と共に具足十念や称名念佛であるために実踐行は各々異なることがわかる。

(2) 仏身義

『華嚴經』の主仏である盧舍那仏は法身仏といわれているが、ここでは西方極樂世界の阿弥陀仏との関係における盧舍那仏の意味を考察することにする。

換言すると、世親をはじめとする澄觀等の華嚴教家は遮那と弥陀は無二であり、蓮華藏世界と西方極樂世界は不離であり不二であると説いているが、如何なる点においてそのように述べができるのであらうか。阿弥陀仏と盧舍那仏は如何なる過程を経て仏陀になりその仏陀の意味は何であるのか。

結論から述べると、弥陀と遮那は久遠劫の過去世に願を発し、功德を積み仏陀になり、その名はそれぞれ異なるが、その意味は光明無量・寿命無量という点において全く同じであるといえる。

阿弥陀仏が正覺を成就して仏陀になつたのは『無量壽經』卷上によると、過去久遠無量劫に銳光如來が興出し、統いて光遠等の五十二仏が出世し、その次に世自在王如來がこの世界に出現した時、國王がいたがその仏陀の説法を聞き心に歡喜を生じ、無上菩提心を發して王位を捨て沙門になり号して法藏という。法藏比丘は無上殊勝の願を発し、その仏

の処所に行き四十八大願を唱えた後に永劫にわたり功德を積み十劫前に正覚を成したという。統いて無量寿仏の意味について、

無量寿仏 号無量光仏 無辺光仏 無礙光仏 無對光仏 炎王光仏 清淨光仏 欲喜光仏 智慧光仏 不斷光仏
難思光仏 無稱光仏 超日月光仏 …… 仏語阿難 無量寿仏 寿命長久不可称計²⁶

と説かれている。すなわち無量寿仏は無量光仏・智慧光仏または日月光仏等と呼ばれているが、その寿命は長久にして計量することができないという。

『阿弥陀經』においては、

舍利弗 於汝意云何 彼仏何故号阿弥陀 舍利弗 彼仏光明無量 照十方國 無所障礙 是故号為阿弥陀 又舍利
弗 彼仏壽命 及其人民 無量無邊 阿僧祇劫 故名阿弥陀²⁷

と説かれている。極樂國土の仏陀を何故に阿弥陀というのか。それはその仏陀の光明が無量で十方の國土を照らしても躊躇がないためであり、その仏陀の壽命は勿論その人民の壽命も無量無邊であるためであると説かれている。

換言すると、阿弥陀仏は無量壽仏であり無量光仏である。それはまた智慧光仏である。それは仏の智慧の壽命が無量であり、智慧の光明が無量であるという意味である。

次に盧舎那仏の成仏因縁と意味は何であるのか。

「盧舎那仏品」によると²⁸「この蓮華藏世界海は、盧舎那仏が菩薩の行を修した時、阿僧祇の世界において微塵數劫に嚴淨したまし所である。一一劫において世界の微塵と同じ如來を恭敬し、供養したてまつり、一一の仏所にて世界海微塵數の願行を淨修した」という。

そして盧舎那仏が正覺を成就したのは同じ「盧舎那仏品」によると、

無量劫海修功德 供養十方一切仏

教化無辺衆生海 卢舎那仏成正覺²⁹

と説かれている。すなわち盧舎那仏は無量劫海に功德を修し、十方の一切の仏陀を供養し、無辺の衆生を教化して正覺を成したという。これは法藏比丘が成仏して極樂世界で説法しているという因縁と大同小異である。

盧舎那仏の意味は何であろうか。

『探玄記』卷第三に、

盧舎那者 古來訖 或云三業滿 或云淨滿 或云廣博嚴淨 今更勘梵本 具言毘盧舍那 卢舎那者 此翻名光明照毘者此云遍 是謂光明遍照也³⁰

と説かれている。毘とは「遍」の意味であり盧舎那とは「光明照」という意味である。故に毘盧舍那とは「光明遍照」という意味であると法藏は説いている。ここでの光明は盧舎那仏の智慧の光明であることは勿論である。

この智慧の光明は無量無辺であることを「世間淨眼品」においては、

仏慧光明無辺際 普照十方無量土
令一切衆面親仏 種種方便化衆生³¹

と説かれている。また「盧舎那仏品」においては、

盧舍那仏大智海 光明普照無有量

如実觀察真諦法 普照一切諸法門³²

と説かれている。すなわち盧舍那仏の智慧光明は無量であり無邊であるという意味から、阿弥陀仏の光明と寿命が無量であり無邊であるということと同じ意味になることがわかる。

盧舍那仏の寿命について『華嚴經』第二十六「壽命品」においては、

仏子 如此娑婆世界釈迦牟尼仏刹一劫 於安樂世界阿彌陀仏刹為一日一夜 安樂世界一劫 於聖服幢世界金剛仏刹
為一日一夜 …… 仏子如是次第 乃至百万阿僧祇世界 最後世界一劫 於勝蓮華世界賢首仏刹為一日一夜³³

と説かれている。この娑婆世界である釈迦牟尼仏刹における一劫は安樂世界である阿彌陀仏刹における一日一夜に過ぎず、阿彌陀仏刹における一劫は聖服幢世界における一日一夜に過ぎない。このようにして百万阿僧祇世界もあるが、その最後の世界の一劫は勝蓮華世界の一日一夜に過ぎないと説かれている。故に勝蓮華世界における寿命が如何に長いものであるかがわかる。この「品」においては盧舍那仏の寿命が無量であると直接的に説いてはいない。澄觀はこの「品」に該当する『八十華嚴經』の「壽命品」を解説するに『隨疏演義鈔』卷七十六において、

然諸經論說三身壽量 化則有始有終 長短萬品 報則有始無終 一得永常 法身無始無終凝然不變³⁴

と説いている。すなわち、三身の寿命は、化身は有始有終であり、報身は有始無終である。法身の寿命は無始無終であるから永遠に不变であると説かれている。ある面で見ると法身盧舍那仏には報身の意味もある。澄觀は報身の寿命は有始無終であるが、法身のそれは無始無終であると区別している。そのように区別してはいるが弥陀も遮那も寿命において

ては無量寿であり、無量光であるという点においては同じである。

上述したところによると、盧舍那仏と阿弥陀仏はその名は各々に異なるが、久遠劫の前に無数劫の間に願と行を修めて仏になつたという点と、その仏の智慧の光明と寿命は無量無辺であるという点において不離であり不二であることがわかる。それでは盧舍那仏は法身仏であるのか報身仏であるのかという問題がある。今まで述べたところによると、盧舍那仏に報身仏の意味がないのではないか、法身仏の意義にて考察した通りに法身とは「諸法の実相」であり、「自然の生命力」といえる。この故に澄觀は法身の寿命は無始無終であると説いたのかも知れない。これについての問題は今後の研究課題にしたい。

(3) 念仏義

念仏とは一般的には「仏を憶念すること」という意味であるが、具体的に説明すると念の対象がそのように単純なだけではない。『十住毘婆娑論』の「助念仏三昧品」においては³⁵、新發意の菩薩は三十二相をもつて仏を念ずべし、法身をもつて仏を念じ、実相をもつて仏を念じ、如來の十号の妙相をもつて仏を念ずるべきであると説かれている。

『大智度論』の「八念義」においては念の対象として仏の十号と仏の三十二相・八十隨形好と神通功德力と戒・定・慧・解脱・解脱知見の五分法身と仏の一切智等を列挙している。

宗密は『行願品疏鉛』卷四³⁶において称名念・觀像念・觀想念そして實相念の四種念仏を説き、相貌を取らずにただ仏名のみを称念することを称名念とし、塑画等の像を念観することを觀像念とし、仏の好相を觀することを觀想念とし、自身及び一切法の真実相を觀ずることを實相念とすると説明している。

念仏というと『觀無量壽經』の所説の十念乃至称名号を考えがちであるが、上述したようによく念仏にも多種があることがわかる。淨土教学においては称名念佛が主に強調されているが、『華嚴經』所説の念佛は如何なる念佛であるのか。前

述したように『華厳經』には念佛・念佛三昧・本願・往生・西方極樂世界・阿弥陀仏・無量寿・無量光等の語句がでてくるが、これらの用語は果たして弥陀淨土思想的な意味に用いられているのであろうか。あるいはそれらは他の意味に説かれているのであろうか。

ここではまず念佛乃至念佛三昧句を『六十華嚴經』から抜粋してみることにする。

(1) 「世間淨眼品」に、

如是一切皆悉成就念佛三昧³⁸

(2) 「盧舍那仏品」に、

普莊嚴童子 見是如來已 卽得念佛三昧³⁹

(3) 「賢首菩薩品」に、

念佛三昧必見仏 命終之後生仏前

見彼臨終勸念佛 又示尊像令瞻敬

又復勸令帰依仏 因是得成見仏光⁴⁰

(4) 「十行品」に、

修習菩提心不亂 念佛三昧不亂 觀察真實法不舌⁴¹

(5) 「如來昇兜率天宮品」に、

以種種寶蓋 供養如來 長養念佛三昧故⁴²

(6) 同品に、

修念佛三昧 充滿法界 度脫衆生 無量無邊⁴³

(7) 「十廻向品」に、

修念佛三昧 充滿法界 度脫衆生 無量無邊

- (8) 同品に、
以心莊嚴而自莊嚴 念仏三昧 普見諸仏⁴⁴
- 如來出世 令一切衆生 得聞仏音 聞仏音 已捨離自大驕慢放逸 得見諸仏
- (9) 同品に、
堅固安住念佛三昧⁴⁵
- 發菩提心 普照一切 正念三世一切諸仏 念仏三昧 悉得具足⁴⁶
- (10) 「十地品」に、
所作善業 布施愛語利益同事 皆不離念佛 不離念佛⁴⁷
- (11) 「離世間品」に、
念仏 於一毛道 見一切仏 教化衆生 念法 不離一如來衆 於一切仏所 對面聞法 悉能受持 隨應衆生 諸根
希望 而度脫之⁴⁸
- (12) 「仏不思議法品」に、
一切諸仏 為一切世界海中種種衆生海 修大善根念佛三昧⁴⁹
- (13) 「仏小相光明功德品」に、
諸天子 五欲纏心 修念佛三昧 皆悉除滅⁵⁰
- (14) 「魔王如來性起品」に、
若有念如來者 得念佛三昧 正念不亂⁵¹
- (15) 「寿命品」に、
如此娑婆世界釈迦牟尼佛利一劫 於安樂世界阿弥陀佛利為一日一夜 安樂世界一劫 於聖服幢世界金剛佛利為一日一夜⁵²

(16) 「入法界品」に、

我若欲見安樂世界無量寿仏 隨意即見⁵³

(17) 同品に、

我唯知此普門光明觀察正念諸仏三昧
この念佛三昧門に統いて二十一種の念佛三昧門が説かれているが、『八十華嚴經』のそれと対照して紹介すると次の如くである。

六十華嚴經

- ① 円満普照念佛三昧門 智光普照念佛門
- ② 一切衆生遠離顛倒念佛三昧門 一切衆生念佛門
- ③ 一切力究竟念佛三昧門 安住力念佛門
- ④ 諸法中心無顛倒念佛三昧門 諸方念佛門
- ⑤ 分別十方一切如來念佛三昧門 不可見處念佛門
- ⑥ 不可見不可入念佛三昧門 住於諸劫念佛門
- ⑦ 諸劫不顛倒念佛三昧門 一切時念佛門
- ⑧ 隨時念佛三昧門 一切刹念佛門
- ⑨ 嚴淨仏刹念佛三昧門 一切世念佛門
- ⑩ 三世不顛倒念佛三昧門 一切境念佛門
- ⑪ 無壞境界念佛三昧門 寂滅念佛門
- ⑫ 寂靜念佛三昧門

八十華嚴經

豈能了知菩薩円満清淨智行 諸大菩薩得円満普照念佛三昧門⁵⁴

- (13)離月離時念佛三昧門 遠離念佛門
 (14)廣大念佛三昧門 広大念佛門
 (15)微細念佛三昧門 微細念佛門
 (16)莊嚴念佛三昧門 莊嚴念佛門
 (17)清淨事念佛三昧門 能事念佛門
 (18)淨心念佛三昧門 自在心念佛門
 (19)淨業念佛三昧門 自業念佛門
 (20)自在念佛三昧門 神変念佛門
 (21)虛空等念佛三昧門⁵⁵ 虛空念佛門⁵⁶
- (18)「入法界品」に、
- 復有香 名清淨莊嚴 從善法堂生 若燒一丸 悉令諸天得念佛三昧⁵⁷
- (19)同品に、
- 見一切刹 一切衆生 皆悉修習念佛三昧⁵⁸

等がある。

以上が『六十華嚴經』所収の代表的な「念佛句」乃至弥陀淨土句であるが、これらを如何に理解すべきであるのか。

智顗の『五方便念佛門』において、

叙開念佛五門 第一名往生念佛三昧門 第二觀相滅罪念佛三昧門 第三諸境唯心念佛三昧門 第四心境俱離念佛三昧門 第五性起圓通念佛三昧門 …… 口称南無阿彌陀佛時 心必願生彼國土 即是稱名往生門 行者想像化身

専注不已 遂得見仏 光明赫奕照触行者 爾時所有罪障皆悉消滅 即是觀相滅罪門 又觀此仏 從自心起無別境界
即是諸境唯心門 又觀此心 亦無自相可得 即是心境俱離門 行者爾時 趣深寂定 放捨一切心意意識 將入涅槃
……
即是性起円通門⁵⁹

と説かれている。智顗によると念仏は称名往生念仏門・観相滅罪念仏三昧門・諸境唯心念仏三昧門・心境俱離念仏三昧門・性起円通念仏三昧門の五種門がある。淨土往生を求める者は口で南無阿弥陀仏を称える称名往生門を、罪障を滅除しようとする者は観相滅罪門によって、そして深寂定を求めて涅槃に入ろうとする者は性起円通門によって念仏を修すべしと説かれている。

法藏は先の⑭「入法界品」にでてくる二十一種の念仏三昧門について「最初の十は念仏の勝徳が円備することを明かし、後の十一は念仏の妙用が自在なることをあらわす⁶⁰」と説いている。澄觀はこの二十一種の念仏三昧を説明しかつ智顗のように五種の念仏門を説いている。

澄觀の『大疏鈔』において、

古人已有五門云 一称名往生念仏門 二觀像滅罪念仏門 三攝境唯心念仏門 四心境無礙念仏門 五緣起円通念仏門 此之五門 初二名局 又但称名亦闕念義 第五一門名則 尽善及其釈義 但事理無礙故今改之 故初一門兼摄前二 此中第五方是性起円通事事無礙義故⁶¹

と説かれている。すなわち念仏門には、称名往生・觀像滅罪・攝境唯心・心境無礙・緣起円通の五種門があるが、称名往生念仏門や觀像滅罪念仏門は名に局執するのみで念義が不足し、緣起円通念仏門のみが性起円通した事事無礙の意味（義）であると説いている。

澄觀は念佛には五種門があるが、性起円通した事事無礙の実相を念する縁起円通念佛門が最も殊勝な念佛であると理解しているようである。

ところが『觀無量壽經』においては、

或有衆生 作不善業五逆十惡 具諸不善 如此愚人 以惡業故 応墮惡道 經歷多劫 受苦無窮 如此愚人 臨命終時 遇善知識種種安慰為說妙法教令念佛 彼人苦逼不違念佛 善友告言 汝若不能念佛者 応稱帰命無量壽佛如是至心令声不絕 具足十念 称南無阿彌陀佛 称仓名故 於念念中 除八十億劫生死之罪 命終之時 見金蓮花猶如日輪住其人前 如一念頃 即得往生極樂世界⁶²

と説かれている。この経文の内容を要約すると、五逆十惡等の諸不善業を累ねて惡道に墮ち、衆苦を受けねばならない人が命終之時に苦しさのために念佛を唱えることができない時、（念佛の）声が断えないよう至心に十念を具足して南無阿彌陀佛を称えれば、その称名の功德によつて八十億劫の生死の罪障が消滅し一念頃に極樂世界に往生することができるという意味である。換言すれば、惡業が深重で臨終時念佛することができない下品者でも称名によつて往生するこどが可能であるという意味である。

弥陀淨土教學においては往生因として称名念佛が主に強調されているが、右の経文によると罪惡が深重で臨終時に（止觀の）念佛をすることができない者は称名念佛によつても往生することが可能であると説くことによつて、称名念佛よりは（止觀）念佛が上位にあることを間接的にあらわしているのである。

上述した通り念佛には称名念・觀像念・觀想念・實相念等があるが、大きく二つに要約することができる。その一つは仏の功德、すなわち相好・十号・神通力・五分法身または大智等を念することであり、もう一つは仏の名号を唱えることである。佛教の諸經論に説かれている念佛は大概の場合は前者に該当し、後者は弥陀淨土教學において説かれてい

る十念といえる。前者を止観念佛とするならば後者は称名念佛といえる。

『華厳經』の念佛乃至念佛三昧句を整理してみると

- ①称名念佛を直接的に説いてはいないが弥陀淨土思想的な内容が説かれている。例えば(3)(15)(16)番等の引用句である。しかし二、三カ所に説かれているだけであり具体的な内容も貧弱である。
- ②より具体的な弥陀淨土思想が説かれているところは『大本華嚴經』ではなく『四十華嚴經』である。この問題は後述することにする。
- ③『華嚴經』には念佛・念佛三昧句がかなりあるが、その内容は特別な意味はなく、ただ仏や仏の功德自体を念ずる止観念佛であるといえる。

(4) 弥陀淨土義

『華嚴經』は大乗菩薩道を説く經典であることは周知の事実である。そのような意味からみると『華嚴經』は聖道自力の教義を説く經であるといえる。これに反して弥陀淨土思想は弥陀の本願力による往生淨土を説く他力往生の教えであるといえる。このような意味においてはこの両思想が正反対の教説として両立することのできない立場にあると考えられる。事実先に考察した通り『華嚴經』の淨土義・仏身義・念佛義等は弥陀淨土教義におけるそれらと類似した点も少なくない。特に淨土義乃至仏身義にのみ局限してみると同じ点もかなり多いのである。しかし全体的な教義からみると、両思想は自力義と他力義という点において決して同一視することはできないのである。旧・新訳には一貫して大乗菩薩の自力義が中心になっているが『四十華嚴經』の訳出にいたると事情が異なる。この經の流通分に該当するところに弥陀淨土思想的な教義が説かれているからである。『華嚴經』全体を通じてみると、「賢首菩薩品⁶³」と「寿命品⁶⁴」のただ二品に弥陀淨土思想的な教義が説かれているだけであり、その二カ所の内容も具体的なものであるというよりは、た

だこの娑婆世界と極樂世界における時間の長短の比較、または念佛三昧によって命終之後に仏前に生じることができるということとして非常に単純である。

しかし『四十華嚴經』の所謂「普賢行願品」には本格的に弥陀淨土思想が説かれており、それも普賢菩薩の十種大願の終結として説かれているという点に問題があると考えられる。

旧・新訳にはなかつた弥陀淨土思想が『四十華嚴經』の訳出にいたつて付加されるようになる過程を考察する必要があるが、この問題を考察する前に三本『華嚴經』の訳出から考察することにする。

澄觀の『行願品疏』卷二に、

第二伝訳者　自流東夏　大有三訳　第一東晉沙門支法領　志樂大乘　捐軀求法　至遮拘盤國　請得華嚴梵本三万六千偈　及請北天竺三藏仏度跋陀羅　唐言覺賢　同帰翻訳　覺賢即甘露飯王之苗裔　：　請於揚州謝司空寺　訳梵本三万六千偈　成晉經六十卷　沙門法業等筆受　慧嚴慧觀等潤文　此為大化之始也　義熙十四年　當如來涅槃已一千二百歲矣　第二大唐証聖元年歲次乙未　年將四百　重迎梵本　于闐三歲寔又難陀　唐言喜學　詔於東都仏授記寺再訳旧文　兼補諸闕　計益九千頌　通旧總四万五千頌　合成唐本八十卷　沙門義淨弘景禪師円測法師神英法師法寶法師賢首法師同訳　復禮法師潤色

第三今貞元十二年歲次丙子　詔罽賓三藏般若　於京師大崇福寺　訳成四十卷　即旧經入法界品　從証聖元年至貞元十二年　總一百二年　流傳此方　今當五百年之運矣　雖經數訳　或九会大本　或一品別行　或三藏持來　或遣使迎請　未有如今聖代⁶⁵

と説かれている。ここに少しく長文を引用したのは二本『華嚴經』と『貞元經』の訳出年代を比較してみて『貞元經』の巻数や翻訳についての澄觀の見解を考察するためである。中国での『華嚴經』の翻訳は三回あつたのである。

第一訳は、仏駄践陀羅が揚州の謝司空寺において梵本三万六千偈を翻訳したがそれは六十巻であった。時は東晉の義熙十四年、すなわち四一八年である。⁶⁶

第二訳は、実叉難陀が東都の仏授記寺にて旧訳を補充して四万五千頌を翻訳してみると八十巻本になった。その時は義淨・円測・法藏等が翻訳に同参し、時は唐の誕聖元年すなわち六九五年であったとされる。⁶⁷

第三訳は、般若三藏が京師の大崇福寺にて翻訳を終えてみると四十巻であつたが、これは旧訳の「入法界品」である。時は貞元十二年すなわち七九六年であつたとされている。⁶⁸

ここで澄觀はこの經の巻数や訳者はいまだ知ることができないと述べているが如何なる理由からであろうか。澄觀は同じ『行願品』の卷十においても、

此一巻經前經數訳皆所未有古德判云經來未尽故無流通⁶⁹

と説いている。般若の『貞元經』の翻訳に詳定者として同参した澄觀であるが、この一巻の經は、前經の巻数や訳者は明らかではない。故に古德が判断しているには「經の由来が未尽であるため流通分がない」と述べたという。この『貞元經』の翻訳に詳定者としてその訳場に同参した澄觀ではあるのに、翻訳以前の經の巻数や訳について詳しく述べることはできないという理由は何であろうか。

先に『華嚴經』の訳出から考察した通り、旧訳は梵本三万六千偈によつて、新訳は四万五千偈によつて翻訳されたものである。すなわちこの両經は定められた梵本偈によつて翻訳されたものであるが、『貞元經』だけは旧訳の「入法界品」に別行経を附加して翻訳したものである。『貞元經』は四十巻より成っているが第一巻から第三十九巻までは旧訳の「入法界品」とその内容がほとんど同じである。しかし第四十巻だけは「入法界品」とは全く関係のないような内容が説かれている。それは普賢菩薩の十種の大願である。この十種大願は『六十華嚴經』や『八十華嚴經』にはない内容であり、

第十「普皆廻向願」に説かれてる弥陀淨土句は別行經の偶願である。

般若は旧訳の「入法界品」に普賢の十大行願を付加して訳出し、同時に最後の「普皆廻向願」に弥陀淨土思想を付加して説いている。

「普皆廻向願」の重頌偈に、

願我臨欲命終時 尽除一切諸障礙

面見彼仏阿彌陀 即得往生安樂刹⁷¹

とある。この教義は明らかに弥陀淨土思想と連結される内容であると思われるが、この偈は般若の『貞元經』以前にすでに別行經として流行していた。東晉時代に仏駄跋陀羅が翻訳した『文殊師利発願經』と不空(七〇五~七七四)訳の『普賢菩薩行願讚』である。

『文殊師利発願經』の偈に、

願我命終時 除滅諸障礙
面見阿彌陀 往生安樂刹⁷²

とあり、不空訳の『普賢菩薩行願讚』には、

當於臨終捨壽時 一切業障皆得転
親覩得見無量光 速往彼刹極樂界⁷³

とある。前者は五言偈で成り立つており、後者は七言偈でできているが、両經共に長行文はなく偈のみとなつている短

経である。この両經の説主は誰なのか。仏經であるのかないのかという問題があつたようである。

澄觀は『行願品疏』卷二において、

今貞元所訳 亦是七言 而上二本 並云是賢吉祥菩薩所造 而非仏經 今乃是經 普賢菩薩所說 良以普賢与賢首名義相濫 又多別行 故昔三藏 謂非仏經⁷⁴

と述べている。仏駄跋陀羅の『文殊師利發願經』と不空訳の『普賢菩薩行願讚』の二本は賢吉祥菩薩が著わしたもので仏經ではないといわれているが、今よく考察するところの經は普賢菩薩が説いたもので普賢と賢首の名義が各々混乱されており、また別行經が多くあるために昔の三藏は仏經ではないとしたと説明し、澄觀は続いて、

又前一本 並無長行 故十行相 不得顯著

と述べた後

今有長行 條流各別 扈然不差 仏經無惑⁷⁵

と述べている。すなわち、仏駄跋陀羅等の二本には長行がないため十行相すなわち普賢菩薩の十種行願の要旨を知ることができないが、この『貞元經』には長行があり條流の各別があり、確実な根拠はないが、仏經であることに疑心を抱く余地はないとしている。すなわち、般若の『貞元經』は長行と偈が備わっており仏經としてみてもかまわないというのが『四十華嚴經』に対する澄觀の理解である。

ここで考察した通り般若訳の『四十華嚴經』は、

(1) 仏駄跋陀羅の『六十華嚴經』より三八〇余年後に訳出された經である。

(2) 六十卷と八十卷の『華嚴經』の「入法界品」に相当するものとして『華嚴經』の完訳ではなく部分訳である。

(3) この『華嚴經』の第一巻から第三十九巻までは旧訳や新訳の内容とほとんど同じであるが、最後の第四十巻だけは普賢の十種行願が説かれている。故にこの経の題目は「入不思議解脱境界普賢行願品」であるが、特にこの第四十巻のみを「普賢行願品」と別に称することもある。

(4) 仏駄跋陀羅訳の『文殊師利發願經』と不空訳の『普賢菩薩行願讚』は偈のみになつて独立の経であるが、般若は普賢の十種行願の末尾にこの偈を付加して第四十巻「普賢行願品」を訳した。この「普賢行願品」に弥陀淨土思想が説かれているといえる。

それでは「普賢行願品」所収の弥陀淨土思想の内容とは如何なるものであるのか。「普賢行願品」によると、

(1) 又復是人 臨命終時 最後刹那 一切諸根悉皆散壞 一切親屬悉皆捨離 一切威勢悉皆退失 輔相大臣 宮城内外
象馬車乘 珍宝伏藏 如是一切 無復相隨 唯此願王 不相捨離 於一切時 引導其前 一刹那中 卽得往生極樂
世界 到已即見阿彌陀仏⁷⁶

(2) 是故汝等 聞此願王 莫生疑念 応當諦受 受已能讀 讀已能誦 誦已能持 乃至書寫 広為人說 是諸人等 於
一念中 所有行願 皆得成就 所獲福聚無量無邊 能於煩惱大苦海中 抵濟衆生 令其出離 皆得往生阿彌陀仏極
樂世界⁷⁷

と説かれている。『四十華嚴經』に説かれている弥陀淨土句はこの両句が全てである。決して多くの量ではない。

(1) 句の内容を意訳すると、最後の刹那にいたつて四大と六根はみな散壞し、すべての親屬は離れて行き、備えていた一切の權威や力は消失し、周囲のすべての眷属と宝ものはすべてなくなつてもただこの願王だけは残つており、刹那中に極樂世界に往生して阿彌陀仏を親見し得るのである。

(2)句の内容は、この願王を聞き疑心を生ずることなく、この願王を受持読誦し書写し広く衆生のために説かねばならない。そうすればその功德は無量無邊にして一切の衆生は煩惱の苦海からみな救済され、阿弥陀の極楽世界に往生することができると説かれている。

ここでの中心主題は願とその功德である。ここでの願とは所謂普賢菩薩の十種大願である「一礼敬諸仏、二称讚如來、三広修供養、四懺悔業障、五隨喜功德、六請轉法輪、七諸仏住世、八常隨仏學、九恒順衆生、十普皆廻向」の十大願のことであり、功德とは普賢菩薩が十種大願を実践して成就した阿弥陀浄土への往生を意味する。普賢菩薩は十大願を実践して得た結果の終結を阿弥陀の浄土に置いていることがわかる。この長文の重頌においても

(3)願我臨欲命終時

尽除一切諸障礙

面見彼仏阿弥陀 即得往生安樂刹⁷⁹

と説かれた後に続いて、

我既往生彼國已

現前成就此大願

一切円滿尽無余

利樂一切衆生界⁸⁰

と説かれている。すなわち普賢菩薩は、命終之時に一切の障礙が除滅して阿弥陀仏を親見せんことを発願している。極楽世界に往生することを発願してそこに往生した後にやっと自分の大願は成就されると宣言している。そしてその後にこの「品」の最後の偈頌に、

我此普賢殊勝行 無邊勝福皆廻向

普願沈溺諸衆生 速往無量光仏刹⁸¹

と説かれている。すなわち十種大願の殊勝な福をもって一切の衆生が阿弥陀仏の極楽世界に往生することを発願している。普賢菩薩の究極の願は諸衆生と共に阿弥陀仏の極楽世界に往生することであることがわかる。

先に述べたように六十巻と八十巻の『華嚴經』で弥陀淨土思想が説かれているところは「賢首菩薩品」と「心王菩薩問阿僧祇品」の二カ所だけであり、その内容も非常に断片的である。換言すると、本来『華嚴經』には弥陀淨土的な思想はほとんど説かれていないといえる。ところが『四十華嚴經』の最後の巻である第四十巻には普賢の十種行願が説かれているが、その最後の願である「普皆廻向願」に弥陀淨土思想が具体的に説かれている。この「普賢行願品」に弥陀淨土思想が説かれるようになったのは般若の意図的な構想のためであると考えられる。

このように蓮華藏世界の結論は弥陀法門であり極樂淨土であるという説にまで前進させたのは、弥陀淨土思想が盛行した時期に『文殊師利癡願經』等によって善財求道の最後に宗教的意義をもたせたものと考えられる。⁸²しかしこのような弥陀淨土思想は『六十華嚴經』より時間的には三八〇余年の後に訳出され、量的には「入法界品」にのみ該当する『四十華嚴經』の所説であり、『大本華嚴經』の所説ではないことは勿論のことである。

三 結 語

これまで『華嚴經』における淨土思想を五つの問題に焦点を絞り論述した。その結果、次のことがいえる。

第一、仏教の教學上における一般的な意味の淨土とは、言葉の通りに「淨かな土」または「清淨な仏國土」という意味である。その淨土の種類は、凡夫人・声聞・菩薩・仏の階位に従つて異なり、処所に従つて唯心・十方・他方淨土に分けて説かれている。『華嚴經』の蓮華藏淨土は専ら仏の居所土であり、処所は特定処のみならず一切の十方仏土が蓮華

藏淨土であるといえる。⁸³

第二、『華嚴經』の淨土義・仏身義・念佛義については便宜上弥陀淨土教学におけるそれらと比較してその同異点について考察した。換言すると華藏と極樂、遮那と弥陀、念佛（念佛・念法・念僧のような念佛）と称名念佛の同異点について考察した結果として、華藏淨土と弥陀淨土は、①願力所成という点と②衆宝莊嚴という点においては同じである。しかし③その場所から見ると華藏淨土は十方の仏上となるが、極樂淨土は西方にあるという点から各々異なる。

仏身義において毘盧遮那仏と阿弥陀仏の名は相異するが、その意味は二つとも無量なる「光明」という意味をもつてにおいては全く同じである。

念佛義において『華嚴經』所説の念佛はほとんどが止觀念佛であるのに反して、弥陀淨土教学においての念佛は主に称名念佛であるという点において念佛義は全く異なるのである。

第三、『華嚴經』所説の弥陀淨土義は二つの場合に分けて考察しなければならない。

『六十華嚴經』や『八十華嚴經』には弥陀淨土思想的な教義は説かれていない。「賢首菩薩品」と「心王菩薩問阿僧祇品」のただの二カ所に弥陀淨土思想的な経句が説かれているが、具体的な内容がなく弥陀淨土思想といえないほどである。「入法界品」の別訳である般若の第四十卷「普賢行願品」に弥陀淨土教義が説かれている。しかしこれは別行の「普賢菩薩行願讚」や「文殊師利發願經」を編入させ、般若が訳出したものであって、『大本華嚴經』には弥陀淨土思想はほとんど説かれていないといえるのである。

注

- 1 大正藏九、四二二上。
- 2 同上一二、二六六下—二七〇上。
- 3 同上一二、三四六下。

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	
前掲註 ² と同。	同上一二、三四八上。	同上一二、三四三上。	同上一二、二六七上一二七〇上。	同上一二、三四七中。	同上一二、三四六上。	大正藏三六、二三二中。	前掲註 ¹ と同。	大正藏九、四一三中。	同上一二、三四二中一下。	同上一二、三四六下—三四七上。	同上九、四八五下。	同上九、四五五下。	同上九、四四二上。	同上一二、二七〇上。	同上一二、三四六下。	『華嚴經』の「華藏世界品」第五之一に「華藏莊嚴世界海住在其中四方均平清淨堅固金剛輪山周匝開闢」（大正藏一〇、三九中） とある。	同上一二、三四六下。	同上九、四〇五下—四〇七上。	同上九、四一二上—一中。	同上九、四〇五下—四〇七上。	同上一二、三四三上。	同上一二、三四八上。

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
同上、 六五五上。	同上、 五五二中・ 五六六下。	同上、 五二四下。	同上、 五一三下。	同上、 五〇七上。	同上、 四八二下。	同上、 四一八上。	同上、 四三七中。	同上、 三九六下。	同上、 四一八下。	同上、 四六八下。	『正統藏經』卷七冊、○九 龍樹『大智度論』卷第二十一「八念義」參照（大正藏二五、二二八下—二二〇下）。	参照（大正藏二五、二二八下—二二〇下）。	同上九、 四〇五下。	同上三五、 一四六下。	同上九、 四〇一中。	同上九、 四〇五下。	同上九、 四一二上。	同上九、 三四七上。	同上九、 四一二中。	同上九、 五八九下。	同上三六、 六〇〇上。	同上二六、 八六上。

- 69 68 『貞元經』の訳出年代は、その跋文によると貞元十四年四月である（大正藏一〇、八四九上）。
- 『正統藏經』卷七冊、〇七五九上。
- る。
- 67 『八十華嚴經』の訳出は、その序文によると証聖元年（六九五）に始めて聖歷二年（六九九）十月八日に終わつたと説いてい
- 66 65 『正統藏經』の跋文によると、義熙十四年即ち西紀四一八年三月十日に翻訳を始めて元熙二年即ち西紀四二〇年六月十日に終
- わつたという（大正藏九、七八八中）。
- 67 『八十華嚴經』の跋文によると証聖元年（六九五）に始めて聖歷二年（六九九）十月八日に終わつたと説いてい
- る。
- 64 63 同上九、四三七中。
- 64 63 同上九、五八九下。
- 65 63 同上九、五八九上—中。
- 65 63 同上九、五八九上—中。
- 66 60 法藏『探玄記』卷十八（大正藏三五、四五七上）。
- 61 60 大正藏三六、六六七中—下。
- 62 61 同上一二、三四六上。
- 63 61 同上九、五八九下。
- 64 60 同上四七、八二上—中。
- 65 59 法藏『探玄記』卷十八（大正藏三五、四五七上）。
- 66 59 同上一〇、三三四中—下。
- 67 58 同上九、七一三中。
- 59 58 同上、七八四上。
- 60 57 同上、六九〇上—中。
- 61 57 同上、六九〇上—中。
- 62 56 同上一〇、三三四中—下。
- 63 56 同上九、六九四下。
- 64 55 同上、五八九下。
- 65 54 同上、五八九下。
- 66 53 同上、六二九下。
- 67 52 同上、五八九下。
- 68 51 同上、六二九下。
- 69 50 同上、六〇五中。
- 70 49 同上、五六中—下。

83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70

『貞元經』の跋文（大正藏一〇、八四八下）。

大正藏一〇、八四八上。

同上、八七九下。

同上、八八一中。

『中統藏經』卷七冊、○八六二上。

同上、○八六三上。

大正藏一〇、八四六下。

前掲註76と同。

大正藏一〇、八四四中。

同上、八四八上。

前掲註79と同。

大正藏一〇、八四八中。

石井教道『華嚴教學成立史』二二七、二二八ページ参照。
法藏『探玄記』卷第三（大正藏三五、一五八中）。